

	<h1>ふくりゅう</h1>	特定非営利活動法人 日本下水文化研究会会報
		発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)
		平成 29 年 10 月 11 日 通巻 91 号

ふくりゅう 91 号 主な目次

第 14 回下水文化研究発表会プログラム	1
特別企画:シンポジウム“サステナブルな援助とは”	2
バルトン研究会から バルトン忌報告・バルトン来日 130 年記念講演会	3
日本下水文化研究会バングラデシュ支部の独立について	4
本の紹介 バングラデシュ 砒素汚染と闘う村「シャムタ」	高村 哲 4
スーパー・グローバル・ハイスクール(SGH)仙台二華高等学校との交流	高橋 邦夫 6
バングラデシュ便り No.39 Romi との会話	高橋 邦夫 8
運営委員会から／編集後記	9

※タイトルをクリックするとその記事にジャンプします／ページ番号をクリックすると目次に戻ります。

第 14 回下水文化研究発表会プログラム

ふくりゅう 90 号でお知らせしましたように第 14 回下水文化研究発表会を下記の日程・会場において開催いたします。研究発表論文には、9 編（うち 1 編は誌上発表）の応募がありました。発表時間は、質疑応答を含めてひとり 30 分です。

日時：11 月 18 日（土）9：50～16：15
 （後述の特別企画・シンポジウムを含む）
 会場：新宿区 NPO 協働推進センター
 （東京都新宿区高田馬場 4-36-12）

会場受付（501） 9:30
 開会あいさつ 9:50
 研究発表 10:00～12:00

番号	発表者	所属	題目	時間
セッション I（会場 501）				（座長：中西 正弘）
1	地田 修一	日本下水文化研究会	船頭が語る肥船の実態	10:00～
2	栗田 彰	日本下水文化研究会	『江戸名所図会』の江戸下水	10:30～
3	山崎 達雄	京都府立大学	昭和初期の京都観光政策と有料便所	11:00～
4	稲場 紀久雄	生命環境文化研究所	下水文化と水循環文化の関係	11:30～

セッション II（会場 401B）				（座長：酒井 彰）
1	鈴木 綾希子	東京大学大学院	飲料水供給技術の受容における社会ネットワークの影響に関する研究	10:00～
2	菊池 美智子	国立国際医療研究センター	途上国都市部スラムにおける衛生行動に関する行動変容を目的とした研究動向：文献レビュー	10:30～

3	酒井 彰	流通科学大学	都市スラムにおける下痢症リスク低減に向けた啓発活動と住民の意識・行動変化—スラム間の相違と変化の継続性—	11:00～
4	Qazi Azad-uz-zaman	JADE Bangladesh	Factors influencing payment for sanitary improvement: experience from rural areas of South-western Bangladesh	11:30～

休憩 (12:00～13:00)

13:00～15:30 (501) 特別企画シンポジウム(シンポジウムの内容については、下記を参照ください)

“サステナブルな援助とは一途上国における安全な水の確保、衛生問題を通して—”

(座長:高橋邦夫)

15:30～15:45 バルトン記念賞授与式

15:45～ 休憩の後、「バルトン来日 130 年記念講演会」(p.3 参照)

新宿NPO協働推進センター案内図

住所: 〒169-0075 新宿区高田馬場 4-36-12
 高田馬場駅徒歩 15分
 (JR山手線・東京メトロ東西線・西武新宿線)
 バス・小滝橋 徒歩 4分
 (都営バス: 飯 64・上 69、関東バス: 宿 02・宿 08)
 TEL: 03-5386-1315

- ※ 参加は無料です。事前申し込みは必要ありませんが、事務局まで参加の旨お知らせいただければ幸いです。参加者には当日の講演集をご購入(1,000円)いただきます。(発表者には1部進呈)
- ※ 下水文化研究発表会講演集は、会員への無料配布はいたしません。希望される会員は、事務局までお申し込みください。郵送いたします。講演集を受取ってから同封の振込用紙にて代金 1,000円と送料をお支払い願います。
- ※ 会場敷地内は「全面禁煙」です。また、新宿区内は条例により「区内全域路上喫煙禁止」となっています。
- ※ 会場周辺は、食事をするところがありません。昼の休憩時間に会場での食事はできますが、ごみはすべて持ち帰ってください。
- ※ 引き続き、本年度、本会分科会のひとつとして活動を始めた「バルトン研究会」が企画する「バルトン来日 130年記念講演会」を開催します。引き続きご参加いただければ幸いです。
- ※ 事務局への連絡は jade@jca.apc.org へ

特別企画シンポジウム “サステナブルな援助とは”

一途上国における安全な水の確保、衛生問題を通して—

趣旨；開発途上国への貢献を意図した活動はそれこそ無数に存在する。そして日本では、それら活動の帰結として“サステナブルな”という形容詞がついて回るのが今日の趨勢とわいていい。“持続可能な”というニュアンスは共有された概念として定着した感があ

る。サステナブルという概念には時間軸が伴う。それは将来世代にとってという尺度が一般的である。将来世代を見据えたイメージは数十年先という将来の不確実性を内含する概念である。ここで重要なことは将来を具現化できるのか、つまり基本的には生存

の持続可能性が前提となっていることである。

そして一方で、目の前には、度重なる自然災害、人為災害、貧困など、明日への生存を賭けたサバイバルとしか言いようのない生活環境がある。このことは支援する側に対してサバイバルな状況下においてサステナブルという概念が受容できるのか、という切実な課題を突き付けて居るわけである。本シンポジウムにおいては、バングラデシュにおける安全な水の確保、衛生問題に関する諸活動をとおして、サステナブルな援助とは何か？そしてその筋道は？サバイバルからサステナブルへ？について議論する。

講演者ならびにプログラムは以下の通り。

13:00-15:00 基調講演

講演 1 川原一之(アジア砒素ネットワーク)“命の水をバングラデシュに”ー砒素がくれた贈り物ー

講演 2 村瀬誠(榊天水研究所)“ヒューマン・スピリットと天水活用”

講演 3 高橋邦夫(日本下水文化研究会)“農村地域におけるエコサン・トイレの普及活動”

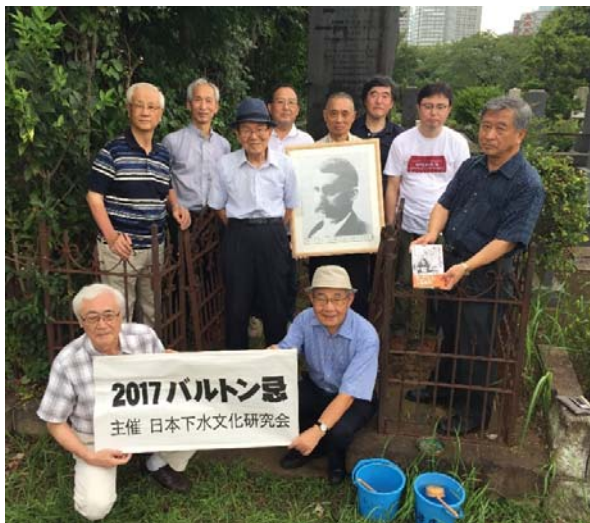
講演 4 酒井彰(日本下水文化研究会)“都市スラム住民への衛生に関する啓発活動”

15:00~15:30 オープン・ディスカッション

バルトン研究会より バルトン忌報告・バルトン来日 130 年記念講演会

8月5日(土)、東京・青山霊園の墓前にて、今年も恒例のバルトン忌が開催されました。例年、猛暑の中での開催ということで、熱中症が心配されるころでしたが、今回はさほどの暑さではなく、参加者一同無事に墓参を済ませることができました。今回は墓参のみで11名の参加となりました。

そこでバルトン研究会では今後、衛生工学、スコットランド、古写真、江戸東京、コナン・ドイルなど、幅広い視点からバルトン氏の業績と生涯を振り返る企画を行っていきたいと考えており、11月18日、下水文化研究発表会終了後、同じ会場にて、「バルトン来日130年記念講演会」を開催します。



バルトン忌に参列された方々

ご存知のようにバルトン氏は、帝国大学工科大学の衛生工学講座担当教師の契約を結び、今から130年前の明治20年(1887年)5月、横浜港に到着。明治32年(1899年)に東京で病没するまでの12年間に、上下水道の近代化はもとより、浅草凌雲閣十二階をデザインしたり、日本写真会を設立して乾板写真術の普及に努めたりと、まさに多才多芸、マルチな大活躍をされました。

- 日時：11月18日(土) 16:00~18:10
- 会場：新宿NPO協働推進センター501
- プログラム：

16:00 バルトン研究会の趣旨説明・入会案内等

16:10~17:00

講演①：佐藤健二(東京大学大学院教授)「浅草十二階とバルトン研究のパイオニア・故喜多川周之氏について」

17:00~17:50

講演②：清水健(英国在住、BBC勤務)「エンジンバラのバルトン記念碑除幕式から11年」

17:50~18:10

質疑応答、オープン・ディスカッション

参加費は無料です。事前の申し込みも不要ですが、参加の旨、事務局(jade@jca.apc.org)までお知らせいただければ幸いです。なお、懇親会については当日ご案内させていただきます。

バルトン研究会は、本年度の総会をもって発足した日本下水文化研究会の新しい分科会です。バルトン研究会は、分科会のみへの入会も可能です。

本記念講演会は、バルトン研究会が主催する初めての事業ということになります。皆様のご参加をお待ちしております。

(文責：バルトン研究会 石井 貴志)

日本下水文化研究会バングラデシュ支部の独立について

バングラデシュで国際協力活動しようとする団体は、現地政府に海外NGO登録を行うことで、海外資金を使った活動を現地で行うことが可能になります。日本下水文化研究会は、2007年にこの登録を行いました。これまで、登録の有効期限は5年でしたから、2012年に更新し、2017年が2度目の更新年にあたります（有効期限2017年9月10日）。

しかし、バングラデシュ政府当局（NGO Affaires Bureau: NGOAB）は、更新期間10年、登録料6,000米ドル（+税）に改定しました。本会にとって、この金額を支払うことは困難であるため、登録更新を行わないという海外技術協力分科会の提案を運営委員会は了承しました。

しかし、現地での活動の継続・継承のため、NGO登録を継承する必要があるため、そのため、本会活動を継承する組織として、本会バングラデシュ支部が下記名称のもと独立し、この組織がNGO登録を継承できるように、8月7日に開催した第3回運営委員会において以下の2点を承認しました。

- 1) 登録NGOの名称変更：Japan Association of Drainage and Environment (JADE)からJapan Association of Drainage and Environment, Bangladesh (JADE Bangladesh)
- 2) 現地組織への権利・責任の移譲：以下の権利ならびに責任をJADE Bangladeshに移譲する
 - これまでの活動に伴うフォローアップ等の責任
 - 現地の資産、物品等
 - 実施中のプロジェクト等の事業執行権：オーストラリア大使館助成事業等、現地で申請して実施中のプロジェクト及び申請済みまたは申請予定の提案事業が採択された場合運営委員会では、上記2点を承諾した旨を伝えるた

め、ただちに英文議事録を作成し、出席委員のサインを添えて、8月9日に現地に送付しました。

JADE Bangladeshでは、すでにExecutive Committee（理事会）を組織しており、8月11日には総会を開催し、定款（Constitution）を承認。同日開催の理事会で、NGOABへの申請の段取りを決め、8月22日に日本から送った書類を併せて、NGOABに提出し、登録申請を行いました。しかしながら、現地組織への権利・責任の移譲等の手続きに関し、NGOAB内部で、意思統一が図られておらず、回答が得られない状況とのことです。

いずれ、バングラデシュ支部の独立は不可避のことでしたので、良いタイミングで、独立の手続きに進めたと考えています。また、Executive Committeeの代表（Chairman）には、同国の水供給・衛生部門（Department of Public Health Engineering）でエンジニアのトップの地位にあつて、国の衛生プロジェクトのリーダーを務めたMd. Anowar Hossain氏、共同代表（Co-chairman）には、長くJICA Bangladeshに勤め、さまざまなプロジェクトに携わってこられたSayedul Arefin氏を迎えました。おふたりとも本会のこれまでの活動で直接お世話になり、懇意にさせてもらっている方々です。事務局長（Secretary）には、最初のバングラデシュ支部スタッフとして採用したTofayel Ahmed氏が就任しました。

実働部隊の充実は、プロジェクトの採択を待たねばならないところですが、プロジェクト期間のみの活動で終わらせることなく、衛生分野での継続的活動につなげていけるような、自立的組織に貼ってしていくことを期待し、できることは支援していきたいと考えています。

（文責：本会代表 酒井彰）

本を紹介 バングラデシュ 砒素汚染と闘う村「シャムタ」

本会会員 高村 哲

2017年4月22日、パソコンを開く。おや、川原さんから私になんてめずらしいメールだ。日本下水文化研究会（以下JADEと記す）は、川原さん、そしてアジア砒素ネットワークには、バングラデシュで陰に日向にたくさんの教えをいただいている。活動のことはいうにおよばず、多くの苦しい場面で息を抜く風をいつもいただいていた。JADEの重鎮ではなくわざわざこちらに言ってくるのだから何か細かい

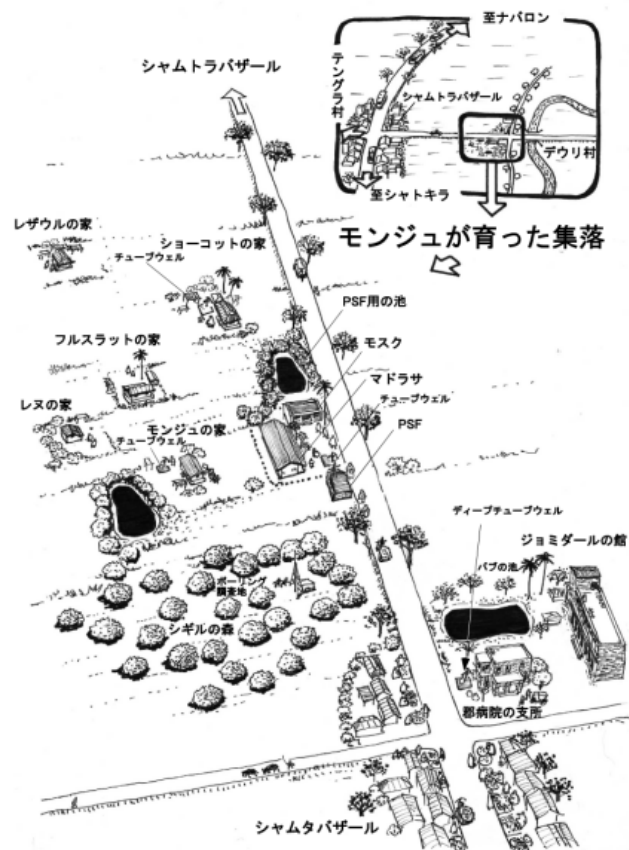
ことであろうと思いつつメールを開いてみた。さて、開いてみるとこんな書き出し。

「高村さんはいま、日本ででしょうか、バングラデシュででしょうか。たいへん厚かましいお願いがあるのですが、きいていただけませんか。」

ご存じのとおり、シャムタ村のモンジュが2013年11月にダッカの出版社UPLから「シャムタ」を出版しました。日本でも読んでほしいと考えて、松村みど

りさんに日本語に翻訳してもらい、福岡市の出版社「海鳥社」から刊行する準備が進んでいます。初校がおわり、写真や地図を挿入して、これから2校に入るところなのですが、日本語版「シャムタ」には、3枚

シャムタ村の患者多発地



の地図をつけることにしました。シャムタの位置図とモンジュの活動地図と、舞台になっているシャムタ村の高濃度砒素汚染集落のイラスト図の3枚です。このイラスト地図も海鳥社に頼むつもりだったのですが、バングラデシュの風土のわかっている方であればむずかしいと思いはじめ、高村さんにひきうけてもらえないだろうか、と考えたしだいです。

昨今の印刷事情から、東京の出版社に断られ、福岡の海鳥社に引き受けてもらった経緯もあって、原著者にも翻訳者にも謝礼なしという条件です。したがって、まことに心苦しいのですが、イラスト地図を描いていただいても、お礼をすることができません。無償の奉仕ということになります。この厚かましいお願いをきいていただけないか、と失礼を承知の上でメールをしたためました。お引き受けいただけるようでしたら、地図の原稿（手書き図）と参考になる写真をメールで送らせていただきます。よろしくお願いいたします。」

そこは知っている場所なので手書きでいいならと

返事を出させてもらった。

「ありがとうございます。高村さんに、モンジュの家の周辺をイラストで描いていただくと最高にうれしいですね。考えているのは、添付のようなイラスト地図です。参考になる写真を別のメールで送りますのでご検討ください。よろしくお願ひします。」

そして幾度かの細かいやりとりがあった。JADEの活動地域と近く、行き来もしているし、村の集会などにも互いに顔を出したりして、現地は大体わかるが、何しろそこに住んでいる人も見るのだから間違えやすくはわかるからいい加減にも書けない。元々正確な地図はない、グーグルアースはあるが、あんな田んぼの中に散らばった家々など、見つけること自体大変だし、見つけても、家だか木だかもわからない。ひどい所は何となくぼやけた緑色という状態で役に立つようなものではない。ざっと描いては家々の距離感や方向感覚を見てもらって「この家とここの間はもう少し遠いと思う」など聞きながら直して行く。それを何度かやってから、図の使用目的に合うような視線を決めて描き直す。まあ、ざっとそんな作業でした。

そんな作業の末に日本版「砒素汚染と闘う村シャムタ」が出版されました。

この企画を進めたのは川原一之さん。記録作家、元記者であり、しっかりと芯の通った、人間への温かい視線を持った方です。川原さんはこう書いています。「モンジュが担当したのが住民への啓発活動です。自分も同じ病気にかかっていただけに、「私たちのようにならないで」という呼びかけは説得力をもち、聞く人の胸を打ちました。



モンジュワラ・パルビン著「砒素汚染と闘う村シャムタ」（松村みどり訳）は海鳥社から2017年9月発行。四六判 並製/248頁 定価 1620円（本体1,500円）

私は「シャムタで経験してきたことを書いてみないか」と勧めました。自然につつまれた伝統的な村の暮らし。その村を襲った原因不明の病気。次々と世を去っていく患者と家族の無念。克服するために始まった国際協力。それでも光明の見いだせない長くて暗いトンネル。苦悩する村人の心に光を当てて、確かな記憶にもとづく豊富なエピソードで構成された作品を生み出したのです」

そのとおりで、村での砒素の被害に気付いてたくさんの困難な活動に向かっていく姿が克明に書かれています。その前に、1971年、女の子として生まれたモンジュがイスラムの村で育っていく様は、まるで江戸時代かと思うような村の人たちの意識が見えてきます。まだ魔女や幽霊もいる迷信の世界が生きています。お化けが出るというから見に行くと、友達のお母さんで、本当は砒素の中毒であったのを知らずに、呪われていて謎の恐ろしい皮膚病にかかったのだと、みんなで見に行くという世界です。原因はわからず、行いが悪いため神の怒りだとも言われ、次々に病気で倒れて死んでいきます。モスクで泣いてアラーに「私の病を治してください」と訴えていた母親も死に、家族のために物乞いもしていた少年も病にかかり牛小屋に隔離されて死んでいきます。

著者も女の子であるために学校に行ったり、バザールで働いたりすることへの周囲からの強い非難、活動を始めてからも、女一人で首都ダッカへ行くことさえも、まことに怪しからんと村での裁判さえも行われます。そんな中で、バングラの砒素問題に取り組むためにやってきた、日本の土呂久で同じ砒素と闘ってきた人たちと出会い、その日本人たちの温かく確実な活動の中から、自分たちがやらないでどうしてこのみじめに死んでいく病気から救われるのかと、繰り返し村の人たちと話し、自分も砒素の症状が出る中、くじけることなく活動の輪を広げ、議員の選挙にも当選し、まだまだ終わらない砒素との戦いを続けていく様子を書いています。

この本を読んでいて、自分の人生のそれぞれの年代と照らし合わせていくと、改めて、この国、そしてアジアの時の流れを感じます。この同じ時間をともに生きている人たちの事をきちんと知っていくことはもっと必要なのだと改めて感じさせてくれる本でした。

以上この出版にかかわった経緯とともに紹介させていただきます。

※ 下水文化研究発表会でのシンポジウムに参加される川原一之さんのご厚意で、この本を会場で販売いたします。

スーパー・グローバル・ハイスクール (SGH) 仙台二華高等学校との交流

本会運営委員 高橋邦夫

去る 6 月 2 日、本会のメール・アドレスに次のようなメールが届いた。

『初めてメールを送らせて頂きます。宮城県仙台二華高等学校教諭の秋場と申します。本校では文部科学省からスーパー・グローバル・ハイスクール (SGH) に指定され、「北上川、メコン川をフィールドとした世界の水問題解決への取組」をテーマに、次世代のグローバル・リーダーの育成を目指した取り組みを行っています。

生徒たちがそれぞれ自分で研究テーマを設定し、夏と冬に行われるメコン川流域における海外フィールドワークを生かして研究を進めていく課題研究もその取り組みの中の 1 つです。(同校の SGH の活動の詳細については、次の URL 参照)

<http://www.nika.myswan.ne.jp/sgh/jp/index.html>

さて、この課題研究の生徒のテーマの 1 つに、カンボジアの農村にバイオトイレを導入できないかという研究があり、現在数名の生徒がこの研究を進めています。対象としている村では、昨年度まで約 3 年

間、夏・冬に現地でインタビュー調査や水質検査などのフィールドワークを実施しており、今年 8 月にも約 10 日間、現地でのフィールドワークを実施する予定です。そこで、バングラデシュ農村域においてエコサン・トイレの導入活動の実績がある貴団体に、ぜひアドバイスを頂ければと思い、ご連絡させて頂いた次第です。(後略)

宮城県仙台二華高等学校教諭 秋場 聡

上記のホームページを見ると、次のような活動趣旨が記されていた。(また文科省 SGH については、次の URL を参照)

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/

『北上川、メコン川をフィールドとした世界の水問題解決への取組』

平成 22 年度の開校以来、本校では、真に国際社会に通じるグローバル・リーダーの育成を目標に、中高で 2 度にわたる海外研修や、毎年行っている姉妹校交流などの特色ある教育活動を展開してき

た。また、「地球環境」を学校の探究テーマに、主に総合的な学習の時間を用いて「世界の水問題」について北上川や八幡平をフィールドに学習を深めてきた。しかし、時間数の制約、資金や人的資源の不足から、課題研究には至らず、「世界の水問題」の紹介に終始している。そこで、グローバル・リーダーに必要な5つの資質・能力が身につくという仮説を立てた。グローバル・リーダーに必要な適切な世界観、本質を見抜く力、共感する力、構想力、自己を相対化する力の5つの資質・能力を身につけるため、以下の取り組みを行う。

I 現実に、世界が直面する深刻な社会問題の解決に正面から取り組む、水問題を抱える世界の現場で、困難を抱えている人々との直接の対話を踏まえて深く考察を重ねること

次世代のリーダーとなる者が避けては通れない課題である「世界の水問題」について、従来の北上川に加えてメコン川をフィールドとして課題研究を行う。「世界の水問題」を「人間」、「経済」、「環境破壊・災害」の三つの視点から分析し、実際に水問題を解決する方法を探究する。

II 自律的な学習集団を形成し、多様な人びとと模擬国連やケースブックスタディなどの様々な言語活動を行うこと

連携先の東北大学の教員・学生や独立行政法人国際協力機構（JICA）から、継続的に直接生徒の課題研究の指導にあたっていただく。また、東北工業大学/JICAの現地事務所の支援を受けながら、北上川とメコン川流域の地域においても精力的に調査・研究を行う。将来的には、現地の高校、大学、専門家、民間企業、国際機関などとも連携し、総合的な水問題の理解と実践的な解決策の提案を行いたい。

そして、約束の6月15日（木）、東京ボランティア・市民活動センター10階のミーティング・ルームで会うことができた。仙台二華高等学校の秋場先生は、4分冊にわたる平成28年度SGH報告書を持参された。高校1学年、2学年、3学年毎の「課題研究」、そして文科省向けの研究開発実施報告書である。それらは、海外ではメコン流域、国内では北上川流域などを対象に、水にかかわる諸課題（治水から水文化まで）を広範に考究しており、その事実にいささか驚きを感じた。驚きとは、まさかという率直な驚きとある種の感動を込めたものである。ちなみに3学年の「課題研究」はすべての論文は英語表記である。その主なテーマをキーワード的に見ていくと、飲み水の

安全性とその確保策、ダム建設に伴う上下流問題、健康と栄養、衛生とトイレ、教育制度と実態、浸水ハザードマップ、水辺選好などとなる。水辺選好では、水辺の魅力に対する支払意思と清掃活動意思など、共分散構造分析を用いた論文が示されていた（ただしフィールドは仙台市・広瀬川）。またこれら論文は、土木学会全国大会や水文・水資源学会全国大会などに公表している。もう一つ付け加えるならば、各論文末の参考文献には安易なwikipediaからの引用は皆無であったことである。

約2時間にわたる先生との対話では、私はバンングラデシュの失敗体験を主に話した。まず村という行政組織は無いこと、そして村の暮らしは貧困状態にあること、総じて貧困な状況にはあるが一定の秩序らしき社会構造がみられること、要するに有力者とおぼしき数人の存在と支配があること。そうした中で、トイレは造るのはた易いが適切に管理することが困難であること、その背景には文化的な慣習、他方生活様式の変化が見逃せないこと。学校などの集合トイレはまさに生きた環境教材として適切と判断するのは早計であること、その背景には公と私の区別の文化的配慮を要すること。長年にわたる援助慣れは自律的な態様に逆行する気配が多分にあること。したがって技術的な合理性などよりも目の前の顕在的な利得がかかわる人々にインセンティブを与えること。総じて言えば、サバイバルな状況においてサステナブルな支援とは何か、という自問自答を繰り返したわけである。

先生の要望は、なんとかして現地でトイレを造りたいというものであったように理解している。SGH制度は5年間を一区切りとする補助制度である。今年（平成29年度）は4年目に該当し、来年を持ってひとまず終結する。その一つの帰結としてのトイレ建設は象徴的な意味は持つであろう。それに対し、私はいきなり造るのではなく、むしろ啓発活動やCBO（Community Based Organization）などの樹立、他の同目的を有している活動団体との連携などを基軸とした活動展開を薦めた。急がば回れである。

幸い名古屋環未来研究所（代表理事；山田雅雄氏）が、カンボジアで安全な飲み水とトイレ問題に取り組んでいるのを知っており紹介した。山田さんとは2年前（2015年4月）韓国大邱で開催された、第7回世界水フォーラム；サイドイベント；「シンプル・低価格技術の活用による非都市地域の水課題の解決『Solution for Water Challenges of Non-Urban Area with Simple and Low-Cost Technologies』」へ

共に準備し参加した因縁があった（平成二十七年度（2015年度）機関誌「海外技術協力分科会」活動報告；参照）。

その後のメールのやり取りの中で、同校で課題研究を担当している地主（じぬし）教諭がすでに名古屋で山田さんにお会いしたことがあり、その際エコサン・トイレについて山田さんから日本下水文化研究会について教えて頂いたという流れが判明した。まさに双方向というべき情報の流れであり、エコサン・トイレというキーワードを介した廻りあわせに Global な因縁を感じたものである。

その後の連絡では、8月上旬（約10日間）、カンボジア・アンコール・クラウ村を訪問し、地図の作成、インタビュー調査（家族構成、収入・支出、飲料水・生活用水の水源と処理方法、水質検査、病気、トイレの有無とニーズ、人糞を堆肥として用いることに対する意識の調査など）、また中学校に建設中の他団体

によるトイレの視察などを行ったとのことであった。トイレへのニーズはあるものの人糞を肥料とすることへの忌避感はぬぐえないこと、今後はバイオトイレを設置するための下地作りのための準備（経済的なメリットを示せるような資料作成、啓発活動、他団体との連携など）を進めていく予定とのことであった。

本校の掲げるグローバル・リーダーに必要な、『適切な世界観』、『本質を見抜く力』、『共感する力』、『構想力』、『自己を相対化する力』はその一つ一つを取り上げて真摯なテーマであり、それについて論じよ、となると相当身構えるテーマである。昨今、MやKなど新設学校認可をめぐる、隠蔽と監視を伴う、利権政治屋・村度官僚・教育商などの低次元のゴタゴタが続いている。彼らは、一応、教育行政推進の当事者ではある。本校の掲げる、リーダーに必要な5つの資質・能力をまずは彼らに問いたいものである。

バン格拉デシュ便り No.39

Romi との会話

本会運営委員 高橋 邦夫

概してこの国の人々は好奇心が旺盛であり、こちらが会話に迎合する態度を示すと積極的に話しかけてくる。彼らは英語が堪能であるかどうかは、あまり関係は無い。こうした場合、ほとんど決まったパターンは、家族構成に関するテーマである。まず、自分の家族の去来をしばらく述べる。村のバザールでスナック菓子などを扱う若い店主は、ダッカで一稼ぎした後、それを資金に店を開き、近くに家を構え、子供は何人いて、その内訳は、などと英語交じりで家族構成を紹介する。

ダッカのホテルで仲良くなったボーイは、食事つき住み込みの安い給料で働いているが、地方の田舎に残した子供の話となると、その教育も含めて熱心な語り口調となる。カレッジや大学に進学させ、最低限、英語を身につけさせたいという彼の目つきは輝いている。一月に一度、バスで3時間の距離にある家族のもとへ帰るのだそうだ。ある50代後半の男性は、子供が3人いて、長女は国内では有名な何々大学で社会科学を勉強している、長男はロンドン大学に留学しており政治学を専攻しており、最近一ヶ月の帰省をし、ついこの間、ロンドンに戻った、次男は地元のカレッジで電気工学を勉強しているなど、とうとうと紹介する。その男性は、現在、BARDで30年を越えるサービス・ホルダーをしている。BARDの

ホステルで隣り合わせた風格のある老人は、独立時、アワミ・リーグの闘志であり、リパブリックの精神のもとに、いかに国の独立に貢献したか、多くの同士に尊敬されたか、そして現在のアワミ・リーグの核たる後輩たるメンバーが、如何に自分を無視しているか嘆いた後、延々と息子や孫の自慢話を続けた。自慢話は、彼らの高学歴と、現在所持している社会的地位の内容に及んだ。

たしかに、新聞などの求人広告は、銀行、国際機関、政府機関や有力な企業・NGOなど限られた求人情報の範囲ではあるが、高学歴、専門性、経験を付帯条件としている場合が多い。と同時に、スキルアップや資格獲得のための専門学校への求人広告も多い。この国の多くの人と名刺交換したが、彼らの学歴は明確に名刺に刻まれている。A 大学の修士卒業、B 大学で何がしの資格を取得、C 大学で Ph. D 取得などである。藤原正彦によれば、ドイツ・チェコあたりの学者には、複数のドクター称号や教授称号を持つ場合、Dr・・・Dr・・・und・Prof などの名刺表記する場合が目につくという。それに引き換え、ケンブリッジやオクスフォードなどではあえて表記もせず、ノーベル賞学者も言われて見なければわからない、といったさりげない態様の差があるらしい。

それはともかく、ひとしきり誇らしげな自慢話と

も言うべき身の上話を終えると、次は決まって、私の家族構成とその内容に対する質問となる。その後、私のさりげない返答で一旦会話は終える。家族に対する質問は、個人との会話の一テーマとなるのみならず、学校など生徒の集団から受ける質問にも必ず含まれる。結婚しているかどうかも格好のテーマであるようだ。

Romi は現在、26 歳の独身女性であり、最近、我々のパートナーとなった。初対面で片言の日本語で履歴を語りだしたのは驚いた。数年前、JICA の奨学制度に合格し、一年間、日本での遊学の体験の持ち主である。いうまでもなく履歴は立派であり、また、奨学試験では、最高の成績でパスしたことを誇らしげに語った。専門は、農村地域の生活改善全般である。

日本での体験を語る口調と内容は、こちらが恥じ入るような賞賛に満ちていた。キーワードで並べれば、親切、やさしい、勤勉、正確、きれい、几帳面、豊か、せかせか、などである。これらの語句で日本・日本人を表現すれば、理想に近い社会像・人間像が描けるであろう。これでは片手落ちであるから、日本の嫌なところについて聞いてみた。彼女は次の 3 点を強調した。

日本では、農村地域の実態調査ということで、多くの農村地域を見てきたらしい。そこでみた高齢者の一人住まいの実態は、バングラデシュでは考えられない悲しい事実であること、そして年齢に関わらず自殺者が多いこと、さらに豊かな都市に居住するホームレスの存在である。これらに共通する悲しみは、孤独な人生とその終末といえるであろう。わが身に振り替えれば、夫婦ともども、年老いた母親は故郷に一人住まいであるかそれに近い。その母親から息子、娘

の稀な帰省と滞在が、どれほどの安眠をもたらすかをしみじみと聞いたことがある。まして近年、孤独という表現から孤立という表記も頻繁になってきた。人は孤独には耐えられると思う、しかし孤立には耐えられないであろう。

この国での活動は現在 9 年目を迎えている。最初から付き合いのある村では、明らかな世代交代が生じている。当時裸で走り回っていた子供達は、いっばしの少青年紳士に成長し、今では当時記憶に無い、新たな小さな子供たちに囲まれるのである。彼らの両親は、そして祖父母はその分だけ老いた訳であるが、まれに死亡の情報を除けば健在である。村には、孤独な人生とその終末は有りそうにない。



この文章は 4 年前に記したものである。Romi はその後、家庭の事情で他家に嫁いだそうである。また私の母親も 3 年前に他界した。

運営委員会から

- 11 月 18 日は、研究発表会、国際協力に関するシンポジウム、バルトン来日 130 年記念講演会と盛りだくさんなプログラムとなりました。多くの方のご参加をお待ちしております。もちろん、ご関心のあるプログラムのみ参加も歓迎いたします。
- 「バルトン来日 130 年記念講演会」は、本年度、日本下水文化研究会の新たな分科会として発足した「バルトン研究会」が企画する最初のイベントになります。当日お知らせいたしますが、バルトン研究会のみへの入会もできますので、お知り合いの方に入会を呼びかけていただけたら幸いです。
- 9 月 9 日、関西支部では、講師に本会評議員・稲場紀久雄氏を迎え、講演会を開催しました。「下水道人の夢を語るー長与専斎、バルトン、久保起、そして関西の群像ー」という演題で、明治から現代までの「下水道人」、「水守り」の活躍と夢について語られました。なお、同日、関西支部の拡大運営委員会が開催され、諸般の事情により支部の解散が決議されました。稲場氏の講演には 41 名が参加し、24 年間の支部活動を閉じるにふさわしい講演会となりました。

編集後記

本会活動の一翼を担い、イベントでの動員力では、本部をはるかにしのぎ、関西の水関連 NPO のネットワークの中心としても多彩な活動を続けてこられた関西支部が、その活動を閉じることになりました。これまでの活動に深く敬意を払いたいと思いつつも、一抹の寂しさを禁じ得ないところす▶一方で、バルトン研究会の発足と始動は、本会の多様さと活動の広がりの可能性がまだまだあることを示すものと思つちます▶バングラデシュ支部についても、

お伝えしたように自立が必至の状況になりました。新たな関係を築いていくことが求められます。海外活動については、11月18日に開催されるシンポジウムでも議論されると思つちますが、我々の支援が、真にターゲットとした人々の生活向上につながつたのか、今一度、問い直し、その答えに近づけるような活動をしばらくは続けていく所存です。

(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会
〒162-0823 新宿区神楽河岸1-1
東京都ボランティア・市民活動センターメールボックス No.78
e-mail: jade@jca.apc.org
URL: <http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>
URL(ブログ): <http://blog.goo.ne.jp/jadetokyo>